[23-5] 第58回日本社会学会発表予定講演要旨

# 東北タイ農村における親族の共同と家族生活

## （1）調査目的と調査村の概要

龍谷大学　　口羽　益生

### 1　調査目的

東南アジアの農業国タイは社会経済の観点から、一般に中央部、北部、東北部、南部の4地域に区分される。東北部は経済水準の最低地域であるが、1970年代になって、国家主導の地域開発が実施され、東北部農村は急速に変貌しつつある。このような変化に対応する農村の動態を解明するため、1964-5年に水野浩一よって調査された東北部のコンケーン(Khon Kaen) 県ドンデーン(Don Daeng) 村の学際的再調査［文部省科学研究費補助金（海外学術調査ー調査総括）による「タイ国村落の動態的研究ー20年間の追跡調査ー（研究代表者　石井米雄）］が1981年と1983年の2度にわたり実施された。

この調査計画は、自然科学系研究者と社会科学系研究者との共同定着調査である点で、従来の村落調査と多少性格を異にしている。このような共同調査が企画されたのは、次のような理由による。従来の社会学的村落調査では、通常、資料は質問票による聴取り調査を中心に収集されるが、発展途上国の村落では、自然や農業にかんする信頼性の高い資料を口頭で得ることは容易ではない。たとえば、1例を挙げるならば、ドンデーン村では、村人は稲作に新技術や化学肥料をまったく用いない。それは村人の無知によるのか、それとも自然の諸条件の特性によるためなのか、社会科学系研究者がそれを実証的に確認することは不可能ではないとしも、かなり手間を要する問題である。これらの問題は、途上国の村落生活の実態や村人の考え方を知るためにかなり重要な意味をもつものであるが、十分な実態調査を経ないで、村人の粗放性や保守性、無知のせいにされる場合が少なくない。どのような自然と社会の背景とメカニズムのもとに、農村の伝統的側面は継承され、新しい側面は導入されつつあるのかという問題解明が、上記共同調査の主要な狙いのひとつである。

この目的のもとに、自然系の研究者によって、自然や耕地の諸条件、作物の生育過程、労働やその他の投入量、収量などが、観察・実測されている。全体の共同研究者は現地の研究協力者を含めて20余名である。研究は一応、各専門分野に分れて進められ、各分野の研究成果は、さらに総合的に意味のあるものへの統合を目指して、個別的にまとめられつつある。

自然系研究者との定着共同調査は非常に有意義なものであった。フィールドにおける情報交換によって、より正確な資料が得られたでけでなく、口頭で得た資料と圃場における実測値や観察によって得た資料のちがいや、そのちがいの社会的意味をも知ることができた。われわれは、社会班として、ドンデーン村の構造変動や水野が十分に資料を集めえなかった諸側面にかんする資料やその他の資料の収集を目指して、村内の全世帯の悉皆調査やサンプル調査、聴取り調査、参与観察、生活時間調査を行った。以下の諸報告は、これらの資料に基づいている。

若干の問題点について触れると、①この種の学際的共同研究においては、情報交換のためのcoordinationに相当の手間を要する。②またかなりの量的、質的資料を得ることができたために、資料の整理・検討に時間を要するだけでなく、事実の類型化や一般化にかなりの試行錯誤的試みが必要である。③さらに、水野が着眼しなかったり、掘り下げなかった側面についての資料を入手したため、水野資料の洗い直しが必要であるが、水野の資料にわれわれの欲しいものがない場合が少なくない。このような問題はあるが、調査村の社会構造の中核を構成する家族生活や親族の共同生活の特性とその変貌過程の理解に焦点を当てて、整理・分析した結果の1部について、以下報告する。

2　調査村の概要

調査村ドンデーン村はタイ国の首都バンコクから約 450km離れた東北部の１中心都市コンケーンの南に位置する稲作農村である。村は塊村状をなし、他のタイ農村と同様、村には寺院(wat) がある。

この村は、およそ 120年前に東方よりのラオ系のタイ移住民によってできた村で、言語は中部タイの標準語とはかなり異なり、イーサン語といわれている。上座部仏教を中心とする信仰は非常に篤いが、民俗信仰や東北地域固有の仏教の考え方もみられる。

この地域の地形の特徴は、凹凸状の高原地形である。ノーング(nong)と呼ばれるすり鉢状の底に水が溜まり、湖沼が多い。ノーングの傾斜面に筆面積の小さい水田が多く、高い部分に畑、川沿いに菜園がある。天候は雨季と乾季に分れ、５～10月の雨季に水稲が栽培される。主食はモチ米である。上記の地形のため、降雨の多い時には、低地の水田は水没し、降雨の少ない時には高地の水田は不作となり、水稲生産はきわめて不安定である。収穫米はほとんど自家消費用で、化学肥料はまったく使用されないが、水稲作は主食確保の為に重視されている。

1964-5年ころには、交通の便が悪く、換金作物はケナフだけであったが、1975年からはコンケーンや近くの町へ小型トラックを改造した小型バスが運行され始め、現在では町へ１日４往復のバス便がある。1976年には電気もつけられ、テレビが急速に普及しつつある。

1964年の世帯数は132 、人口は810 人であったが、1983年には、世帯数は 183、人口は 907人に増加している。世帯数の増加に比べれば、人口の増加率は他出のために低い。この20年間に最も大きく変化したものは社会経済条件である。町での就労の機会が増え、通勤者も増えて、賃金生活者や商業に従事するものの増加が目立っている。換金作物としては、畑でキャッサバを栽培し、菜園ではトウガラシや他の野菜を作り、町の市場へ毎日のように売りにいくものも多い。

ドンデーン村は、行政的にはコンケン県ムアング郡ドンハン行政区に属している。村長は成人男女の村人によって選出され、任期は辞任しないかぎり60歳までである。10ヵ村から構成される行政区の区長は村長を被選挙者として全区民の成人男女によって選出され、任期は５年である。郡長と知事は官選である。行政区には、区長を中心に区内の各村の村長と村代表と行政区の医務委員１名と書記（区内の小学校長１名）１名からなる区議会がある。区議会は区レベルの自治活動を推進するために、1956年に始められたものの、ほとんど名ばかりのものであったが、1975年から政府の援助により、区内の開発計画を自主的に作成し、政府によって選定された計画を実施する主体となって、最近ではかなり重要な役割を演じつつある。村長は２名の助役を任命し、対外的には村の公式の代表者であり、村の世話役である。

このような村の最小にして基本的な社会単位として、家族や親族の共住単位である世帯(khoop hien)がある。また親族を意味するスム(sum) というカテゴリーがある。スムについては水野はまったく触れていないが、スムは狭義には親子、夫婦、きょうだいを中心とした家族を意味し、広義には、祖父母、親、子、孫の４～５世代の親族やふたいとこあたりまでの父方母方双方の親族を指している。この親族は日常相互に互助が期待される間柄である。

伝統的な妻方居住慣行と娘相続慣行が支配的であるために、娘世帯は婚後、親世帯と同居の後、親世帯の近くに居住する。そして経済的に独立するまで、親・娘世帯は生産と消費において一世帯のごとく共同する事例が少なくない。この近親世帯間共同の関係を水野は「屋敷地共住集団」と呼んだ。しかし、それは屋敷地の共同を契機とするものではなく、基本的には近親間の生産と消費の互助的共同のために成立する関係である。確かにこの共同関係では、親・娘関係が支配的ではあるが、それに限ったものではなく、親・息子間やきょうだい間、おば・甥間にも、共同が必要とされる場合には、見られるものである。このような家族・親族の共同関係の性格と内容、その意味論的背景や、社会経済的状況の諸変化に対応してみられる変化についての分析が、以下の諸報告の中心テーマである。

# （２）　親族関係と世帯間共同

滋賀県立短期大学　武邑尚彦

## 1　問題

本報告では、調査村ドンデーン村における親族間の互助的規範と近親の世帯間共同の特徴について、現地調査で得た資料の分析結果に基づいて報告する。

1964年から1965年にかけて同村を調査した水野浩一（慣用にしたがい敬称を略す）は、同村においてかなり見られる近親間の一種の農業共同組織を「屋敷地共住集団」と名づけ、これを同村の社会構造を理解するための中核的構造であるとした。水野によれば、この集団の特徴は、親・娘世帯間共同にある。すなわち、妻方居住慣行により、一般的には、娘が結婚すれば、娘夫婦は２－３年間妻方の親と同居した後、別居するが、娘世帯が経済的に自立するまで、親は娘世帯を扶助する。このための親・娘世帯間共同が、「屋敷地共住集団」の中核的構成である。このような過程を経て、老親の扶養は、最後に結婚して親と同居する末娘によってなされるものと定式化される。

問題(1)　確かに水野は、この種の近親の世帯間共同の中核的な部分を指摘しているが、そこでは支配的な諸特徴のみが、やや単純化されすぎているきらいがある。事実、水野の資料にも、親・息子世帯間共同の事例があるが、われわれの調査では、きょうだい間、おば・甥間の共同もあり、また老親扶養のための親・娘間共同もみられる。水野の定式化の視点のみでは、これら諸事例の説明は別の原理によらねばならない。その点で、これらすべてを説明する原理が求められる必要がある。

問題(2)　水野自身のちに、「屋敷地共住集団」という表現よりは、「屋敷地共住結合」という方が事実を理解するためには、より適切であることを示唆しているが、このような近親の世帯間共同は、ひとつの集団として捉えにくい側面がある。たとえば、子世帯が親世帯ときょうだいの世帯と二重に共同関係を持つものもあり、必ずしも１集団として捉えがたい。事実、共同の目標が達成されれば、共同関係は解消されてしまう。農業の経営単位としては、共同関係にある世帯を一つの社会単位として見る必要があるが、この共同関係は世帯ほどの永続性を持つものではなく、一般には短いものであり、作季単位のものもある。したがって、共同集団というよりは、ある目標達成のための戦略的な近親の世帯間の共同結合または共同関係として見た方が望ましいように考えられる。

問題(3)　また、この共同関係は、必ずしも屋敷地という土地を契機に同一の屋敷地に共住する近親の世帯間のみの共同ではない。むしろ親族の互助の規範に基づく日常的な生産と消費の共同が重要なのであって、水野自身の資料もこれを示している。近親は近接地に居住することが望まれているが、近接地に屋敷地を確保することが困難になりつつある今日では、屋敷地共住という限定は無意味になりつつある。すなわち、近親の世帯間共同は、本来屋敷地の共住によるものではなく、近親の互助規範による共同関係である。

2　報告の要点

本報告では、以上の3点に留意しながら問題を再検討し、1981年の7－12月の5か月間と1983年の7－10月の4か月間の現地での共同調査において、質問票によって共同で行なわれた村内の全戸悉皆調査や報告者の聴取調査によって得た資料の分析結果に基づいて、以下の項目について報告する。

(1) 親族関係とその規範

①世帯と親族についての村人のカテゴリー

②親族における互助の規範

(2) 近親の世帯間共同の特徴

①世帯の構成－家族周期－

②世帯間共同の諸形態

(3) 1964年と1981年の比較

まず最初に、調査村における親族関係に見られる互助規範の特徴について述べる。この規範に基づき、近親の世帯間の日常的な生産・消費の共同は、主食を確保するために水田という基本財を中心に行なわれるが、妻方居住慣行と関連して、農地のごとき不動産の相続が娘中心に行なわれる。この意味で、近親の世帯間共同は特に親・娘世帯間で行なわれる事例が目立って多いが、親族の互助規範にしたがって、困窮している近親を扶助する形で他の間柄でも見られる。これらの世帯間共同を、いくつかの類型に分けて、その特徴について説明する。なお、最後に、水野の調査時点とわれわれの調査時点における近親の世帯間共同の特徴の相違について、気づいた点についても触れたい。

# 東北タイ農村における親族の共同と家族生活

## （3）家族・親族における経済生活の二面性

京都女子大学　　舟橋和夫

1）目的：本報告は、タイ東北部の農村、ドンデーン村の社会経済構造の把握を目指して、現地調査で得た一部の資料を分析した結果にかんする中間報告である。具体的には、村人の立場から見た日常の経済活動の特徴の解明を狙いとしている。換言すれば、村人の経済諸活動に対する彼等自身の考え方と、それに基づく経済活動そのものを通して、村人の固有な経済生活のあり方を理解しようとするものである。この視点から、1964年に行われた水野浩一の調査時点からの特徴的な変化についても、検討を試みたい。

2）データ：1981年実施のドンデーン村全戸の悉皆調査（176戸）、および1984年に Hong Simbanという水田団地に水田を所有・耕作する農家全戸（47戸）を対象に実施した調査（NSB調査）、それに1981年の6カ月間、毎夕訪問して観察・聴き取り調査を行った2戸の農家についてのデータを用いる。

3）報告の概要：村人の経済活動には、自給自足の側面と、現金収入に依存する側面が見られる。

前者は、稲作に関連する経済活動である。稲作は、お椀状の地形（nong）に緩やかな階段のごとく形成された天水田において営まれている。天水稲作は不確実な降雨による被害が生じやすく、収量は非常に不安定である。たとえば、1978年は大洪水でほとんど全滅、1979年は大旱魃、1980年は洪水で壊滅、1981年は中旱魃、1982年は洪水で冠水、1983年は順調に雨が降り、未曽有の大豊作といった具合である。このような不安定な稲作の経済システムに、伝統的な親族間の相互扶助規範が目立ってみられる。その特徴は、1964年にドンデーン村を調査した水野浩一によって、すでに指摘されている。水野は、ドンデーン村の社会経済構造を議論する際、『屋敷地共住集団』という概念を用いて、家族周期（親族関係）と社会階層の関係を考察した。屋敷地共住集団とは、親族間の、とりわけ親と娘間を中心とする親族間の、水田の共同耕作と米の共同消費(het nam kan, kin nam kan)という相互扶助を中心とする概念であった。本報告ではこれらも踏まえて、水野があまり論じなかった水田の共同耕作・共同消費を中心とする親族間の相互扶助のあり方の特徴について説明する。

後者は、すなわち、現金収入に依存する経済活動の側面は、稲作以外の農業および農外収入にかんする経済活動である。ひとつは丘陵地に広がる畑で栽培されるキャッサバ、比較的小さな菜園で労働集約的に栽培されるトウガラシなど換金作物の耕作や、水牛・牛・馬・豚などの家畜飼養、あるいは池沼での漁撈といった経済活動である。もうひとつは、ドンデーン村内で日用雑貨店や精米所などの自営業を営んだり、村から通勤できる距離に位置するコカコーラ会社や東北タイ地域農業センターなどの政府機関に勤めたり、近くの町、コンケー

ンの建設現場で日雇労働者として働いたり、あるいは遠く海外へ出稼ぎに行くといった経済活動である。近年、交通網の整備によって、このような現金収入の機会は増加しつつある。この経済システムは、上記のような相互扶助的規範によるのではなく、経済合理性の強いものである。

上述のような自給自足経済の相互扶助性の強い側面と、貨幣経済の独立性の強い側面との相互関係の分析が第三の問題である。この問題はドンデーン村の社会経済構造の基本的特徴を捉えるための重要な問題であるように思われる。まだ、検討の余地を充分残してはいるが、報告者は現段階での一応の仮説として次のように考える。両者はちょうどコインの表と裏の関係のように、表と裏があってはじめて全体として成り立つ。どちらか一方のみでは成立しない関係にある。表側を見れば裏は見えにくい。裏を強調すれば表は霞んでしまう。稲作経営の相互扶助の裏では、現金経済による個人の独立性の強い側面も潜んでおり、経済合理性を追求する現金収入も、主食獲得のための相互扶助によって支えられている。現金収入の機会が目立って増加しつつある現在でも、両者の結合は強いが、収入の増加は両者の結合のバランスに依存しているように思える。このようなドンデーン村における両者の性格についての一試論を試み、1964年からの変化の特徴にも触れてみたい。

なお、水野浩一の調査結果については、『タイ農村の社会組織』創文社、1981年を参照。また、われわれの調査の概要については、Fukui,H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. An Interim Report / A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1983.と、 Fukui,H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. The Second Interim Report / A Rice-Growing Village Revisited : An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1985. を参照。

# 東北タイ農村における親族の共同と家族生活
## (4) 親族における宗教的積善（タンブン）行為の意味

龍谷大学　　林　行夫

はじめに

個人の来世にかかわる宗教的積善行為は、他のタイ農村同様、調査村ドンデーンでも日常的に観察される最も顕著な実践宗教の一形態である。本報告の狙いは、タンブンが、その行為者を包摂する家族－親族の社会関係のネットワークのなかで、どのような意味をもつものと理解され、実践されているのかを示すことにある。報告者は1983年1月から10月にわたって村内に定着し、主として聴取り調査を行った。ここで使用する資料はその一部である。

I　調査村における宗教生活のひとつの基調をなすものは、タイ国教の上座部仏教である。その制度的象徴である村の寺院(wat) は、開村に伴って人々が自ら建立し、金品を寄進することで維持・整備されてきた。僧侶への日々の食事も村人の布施行為によって調達される。仏日(wan phra)ごとには、主として中・高年の女性が寺院を訪れ、在家戒の遵守に余念がない。さらに、寺院を舞台とする全村あげての年中儀礼(hit sip song)は、ハレの布施行であるとともに、村の歳時記を彩る祝祭でもある。また、村の男性のほとんどは、若い時に出家して僧侶もしくは見習僧となる。還俗は自由であるため、仏門に入ることは成人式のような意味をもっており、ライフサイクルのなかでも仏教が占める位置は大きい。それは、人々の日常生活のなかで生きた宗教として実践されている。

人々にとって、それらはすべて個人の功徳にかかわる宗教行動である。その行動の究極的目標は、持戒行を通して教義をきわめ、解脱(niphan)に至る達人宗教のそれではなく、功徳を積むことによって来世で得られるとされるより良き転生にある。再び人間として、しかも現世よりも境遇の良い生をうけることが、人々の最も重要な宗教的関心事である。功徳を得ることは三宝の維持に貢献する善行をなすことである。これをタンブン［タンは「積む」、ブンは「功徳」の意］という。タンブンは、仏教徒であるタイ一般民衆の宗教的核心をなすものである。それは業(karma) の概念にもとづく考えであるが、輪廻転生の秩序概念と功徳の多寡の問題は人々の前世－現世－来世を定位づける解釈の枠組として深く浸透している。すなわち、現世での地位や境遇は、前世で積んだ功徳の多寡によって決る。また、現世でタンブンに励めば、死後は「極楽」へ行き、やがてより良き転生を得て幸福になれるので、人々にとって生涯において功徳の蓄積につとめることが唯一重要な問題となる。寺院や僧侶は、このようなタンブンの中枢、功徳の源泉としての意味をもっている。

II　具体的なタンブンの方法は自ら出家するほか、俗人として布施・寄進を行ったり、在家戒を遵守するタイプに大別できる。そのいずれにおいても功徳はタンブンの行為者に個人的に蓄積されるものである。しかし、タンブンそれ自体は決して個人のレベルで完結する行為ではない。タンブンが成立する社会的回路は常に開かれたものである。すなわち、基本的に功徳は互助関係にある家族や親族の間柄を通して分ち合うことができるものとして捉えられている。

日常行われる僧侶への食事布施の行為者は、家事労働から開放された老女が中心である。布施者である当人は功徳を積む喜びとともに、これを自らの重要なタンブン行為のひとつと考えている。同時に、その功徳は、彼女と同一家屋に住む家族成員のものでもあるという。家族から誰かひとりが食事布施に出れば、他の成員は行く必要はない。布施者はいわば家族成員を代表するかたちで功徳を得る。逆にいえば、功徳は布施者が僧侶に食事を献上した時点で、家族成員のものとして獲得される。同様の論理にもとづいて、年中儀礼においては世帯を単位として金品が寺院・僧侶に寄進され、功徳が獲得される。

また、得度式において功徳を得る主体は出家者たる男子である。しかし、同時に功徳を獲得したと喜ぶのは、儀礼の主催者である出家者の両親、とりわけ生涯僧侶にはなれない母親である。さらに、主催者のきょうだいや肉親ではなくとも、この得度式に要する費用を援助した他の人々も功徳を得ることができる。出家者の得た功徳が両親や援助者に対する報恩の形をとるようにシェアされるためである。この得度式のように、ある家族や親族がタンブン儀礼の主催者となるタイプの儀礼には、他にカチン儀礼や葬儀などがあるが、どのような形であれ、儀礼にかかわる他の人々も功徳の分ち合いにあずかるとされている。

功徳を近親者の間で分ち合うことを最も端的に示し、かつこれを強調するのは、遺族による故人への功徳の転送(yat nam) と、重要とされるいくつかの年中儀礼（カチン儀礼やカオサーク儀礼）時での「ホームカン」(hom kan) である。

ホームカンとは東北タイ方言で「寄り集う」を意味するが、一般には僧侶が関与するすべてのタンブン儀礼において、僧侶・寺院に献納する金品をもち寄り、共同して食事や供養品を作るために集まることをいう。そしてオヤモトの家に集まった近親者たちが共食する。僧侶に布施する食事や菓子を、近親者同士で共に作り、共に食することは互いに腹を満たし、心を満たし合う意味をもっている。食事は功徳にたとえられ、近親者の間でこれを分ち合うことが強調される。しかも、金品の献納によって他界した近親へも功徳がふりむけられる。すなわち、自らの功徳と故人のよりよき転生のために、近親間の共同が行われるのである。

どのような方法であれ個人が獲得した功徳は、より良き転生を望む故人に転送することができる。功徳の転送は故人を送りだした者に義務づけられる供養行為の一端を示すものである。親子関係でいえば、それは子供を保護・養育してきた親（保護者）が老後を迎えると逆に子供が老親を世話する報恩（孝行）の延長線上にある行為である。このような故人への功徳の転送は、ブンを分ち合うことの意味を象徴的に暗示してもいる。つまり、そのような制度的布置は、個人にとっての救済目標であるよりよき転生の問題が功徳の多寡によって把握されることに起因する。功徳は目にみえぬ精神的財産のようなものであり、一個人が生涯において蓄積されるものだけでは来世のために充分かどうか確信を与えることがない。したがって、個人の宗教的目標の達成は個人的なレベルにとどまらず、当人の近親に委ねられることによって補われることになる。すなわち、功徳の転送は、故人にすればこの世でタンブンできる近親者に期待してやまない行為であり、転送する者にとっては故人の生前の恩恵に報いる意味をもつ。

タンブンは親子関係を核とする家族成員および近親間、さらには儀礼への直接間接の参与者をも包摂する社会的サークルのなかで展開するという意味において、それらの社会的結合の意味論的基盤となっている。タンブンは常に何らかの間柄のネットワークを通して、功徳を分ち合う回路のなかで共同で行われる行為として社会的に強調される。換言すれば、功徳の個人的獲得とその分ち合いは、同じタンブン行為のふたつの結果として表われる。同時に、共に分ち合うことによって初めて功徳の個人的獲得がより確かなものとして捉えられる。功徳を近親と村人の双方のレベルで分ち合うことを目標とするタンブン儀礼が社会的に高く評価されるのも、そのようなタンブンの意味論理によるものといえよう。

＜本報告に関連する文献＞

林　行夫　1984　「モータムと『呪術的仏教』：東北タイ・ドンデーン村におけるクンプラタム信仰を中心に」　『アジア経済』25(10): 77-98.

————, 1985　「東北タイ・ドンデーン村：葬儀をめぐるブン（功徳）と社会関係」『東南アジア研究』　23(3)　［近刊］。

Hayashi Yukio　1985. "A Temple, Rituals and World-View in Don Daeng" in Fukui, H., Kaida, Y. and Kuchiba, M.(eds.) A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand (The Second Interim Report),pp. 242-258. The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

# 東北タイ農村における親族の共同と家族生活
## （5）生活時間調査からみた家族・親族の生活共同

京都大学　小池　聡

### 1．はじめに

ドンデーン村での生活時間調査は、農民の生活行動を時間軸上に投影させ、その包括的な実態を浮かび上がらせようとする意図をもっている。調査農家から選択された1名が、あらかじめ作成された調査票上に世帯構成員の行動を記録した。調査から得られたデータは、生活行動の記録といえるものである。調査は2回行った（1981 8月 5日 ~ 12月20日，1983年 7月13日 ~ 1984年 3月13日）。とくにことわりのない場合、ここでの分析は83年調査でのサンプル農家を対象とする。サンプルは5世帯23名であり、さまざまな経済状態の農家が含まれている（調査方法やサンプルに関する詳細は須羽の報告要旨を参照されたい）。以下では、農業がどのような世帯成員間の分業・共同関係によって営まれているかを具体的に記述する。また、その分業・共同関係のあり方が家族周期にともなってどう変わるか、そして世帯内でなく近親の世帯間における生産共同の事例についても分析を行う。

### 2．農業生産と夫と妻との分業

夫婦2人を基幹労働力とするサンプル2世帯（チナウォン家：夫 28歳，妻 30歳；ダンサイ家：夫37歳，妻 32歳）では、稲作は夫と妻とがほぼ等しい時間を、また野菜作は妻が、畑作（キャサバ）は夫がより多くの時間を投入することにより営まれる。

基本的に、稲作では男性と女性の作業が明確にわかれる反面、双方によって行われる作業がある。最も時間を消費する作業である田植・刈取は夫婦の共同作業である。田植と同じ時期に行われる作業のうち、耕起，しろかき，そしてあぜの修理は夫が、苗取は妻が主に行う。そして、夫が耕起，しろかきをしているとき、そのかたわらで苗取が妻によって行われている。このように、稲作では夫と妻とがそれぞれの役割である別々の作業を共に行うことがよくみられる。以上の結果として、「水田で共に働く」ことは当事者にとって強く認識されていると思われる。

野菜作の作業内容からみると、菜園の耕起，農薬・化学肥料の施用が夫の仕事、野菜収穫，作付が妻の仕事となっている。ただし、この分業は実際にそれほど厳密なものでない。また、夫と妻との労働配分を考えるとき、チナウォン家では老夫婦（夫 75歳，妻 74歳）の労働力の存在を無視できない。野菜作で最も労働力を要する作業は、除草と水やりである。除草は夫と妻とによる共同作業であるが、水やりを両者が共同で行うのは稀である。チナウォン家では、主にこれを担う夫が水やりをしないとき（労働についてみると、夫は稲の脱穀，運搬，まき割りなどをしている）、妻が水やりをして乾季ではたえず園地に水がまかれる。水やりは乾季に長期間連続して必要とされるが、一回の労働量が小さいからこのような労働配分が成り立つ。

キャサバ栽培の主な作業は、作付（繁殖には挿木が用いられる），耕起，収穫である。こ

のうち、収穫は夫と妻との共同作業である。また、耕起は水田，菜園と同じく夫が行い、その分だけ畑作労働時間が妻より大きくなっている。作付のとき、ダンサイ家では夫が挿木用の茎を刈り取り、妻がそれを土にさしてゆく作業のパターンがみられる。これに対し、チナウォン家では夫と妻とが共同で挿木をしており、上記のような作業パターンを前提とすれば、夫・妻以外の第三者、つまり世帯外労働力の存在が想定できる。

3．家族周期と世帯内分業

次に、成長した子供が世帯の労働過程に十分に関与している事例として、チャンタパン家をとりあげ、とくに稲作生産での世帯成員間の分業関係・共同労働のあり方が、チナウォン家，ダンサイ家とどのように異なるかを分析する。チャンタパン家は、労働力の点からみると、家族周期上でチナウォン家，ダンサイ家が発展した段階にある。チャンタパン家の基幹労働者は、世帯主夫婦（夫54歳，妻49歳）と長男（25歳）である。

夫婦以外の世帯成員を考慮せずに、稲作生産における夫と妻との分業・共同労働をみるとき、チナウォン家，ダンサイ家と似たような実態が明らかになる。例えば、田植・刈取には両者が共にかかわるのが顕著である。しかし世帯全体でみれば、夫婦のみより、それに長男が加わった三者による共同労働のほうが圧倒的に多い。上にあげた田植・刈取も夫婦と長男による共同作業である。また、作業内容についてみると、長男は父親の仕事には関与するが、母親の仕事はほとんど行わない。このように、チャンタパン家の稲作生産における成員間の分業，共同労働のあり方は、家族周期上では前段階にあるチナウォン家，ダンサイ家を基本としている。そして、基幹労働者となった長男が、稲作生産における母親のパートナーである父親の役割を補うか、あるいは両親による共同作業に加わることによって変形されたものといえる。

4．近親の世帯間共同の事例分析

81年調査のＵ世帯とＫ世帯は、それぞれ親世帯と子世帯であり、まるで一世帯のような生産面での共同関係をもつ。ここでは、この共同関係を稲作生産を例にとって分析する。

稲作はＵ世帯の世帯主（Ｕ１），次女（Ｕ３），三女（Ｕ４），そしてＫ世帯の妻（Ｋ２＝Ｕ１の長女）によって主に営まれている（Ｋ２の夫は東北地域農業センターの農業労働者として勤きに出ていた）。田植，刈取は、主として［Ｋ２，Ｕ３，Ｕ４］，または［Ｋ２，Ｕ３］の組合せ、つまり姉妹による共同作業である。ここに、世帯の枠を越えた共同労働の実例をみることができる。この組合せに加わることは非常に少ないが、そのときＵ１は同時期に行われる別の作業（耕起，しろかき，収穫した稲の結束など）に従事する。したがって、作業別でみなければ、上記の４名が同時に稲作生産にかかわっているパターンが最も頻繁にみられる。また、Ｕ世帯とＫ世帯との稲作共同経営での分業は、Ｕ１が唯一の男子であることもあって、基本的に姉妹からなるグループとＵ１との間で体系づけられていると考えられる。

5．おわりに

以上の世帯内分業、近親の世帯間共同の事例分析は、世帯（あるいは生産面での共同関係をもつ近親の世帯）以外の労働力の存在についてあまり触れていない。しかし、世帯外の労働力を想定しないと理解できない点も多くある。どの作業に，どういう人が（人間関係・社会関係），どれだけ（時間量）関与しているかについての分析結果は発表時に報告する。

# 東北タイ農村における親族の共同と家族生活

## （６）生活時間調査からみた家族の社会空間

龍谷大学　　須羽　新二

本発表は、東北タイ農村ドンデーン村の日常生活において村人がどのような人と、どういう行動を共にするかを、５世帯23人の８ケ月におよぶ生活時間調査に基づいて定量的に分析した結果の中間報告である。

一般に生活時間調査は、ある一定の時点における母集団の特定の生活行動での時間利用を知るために行なわれる。そのためできるかぎり短く調査期間をとり、多くの標本を無作為に抽出して代表性を高めようとする。しかし、われわれのとった方法は一般の生活時間調査とは全く異なるものである。それはこの調査の性格と目的による。

ドンテーン村での生活時間調査は、多分野の研究者によるプロジェクトの一環として行なわれた。生活時間調査それ自体は、村落においての長期定着調査の中で、一般に記述によって得られる村人の生活というものを、数量的なデータとして把握することを目的とした。しかしこの調査は、社会学・人類学のデータと経済学、農学などのデータを結びつけ、諸分析の数字による裏づけをとるという意味あいも大きい。そのため対象、方法に種々の限定が加えられた。

ドンデーン村では天水田での稲作が主たる生業である。そこで村人の生活像を包括的に把握するために、稲作期間を中心にしてできるかぎり長期の継続した調査が望まれた。よって調査対象数は少なくせざるを得なかった。

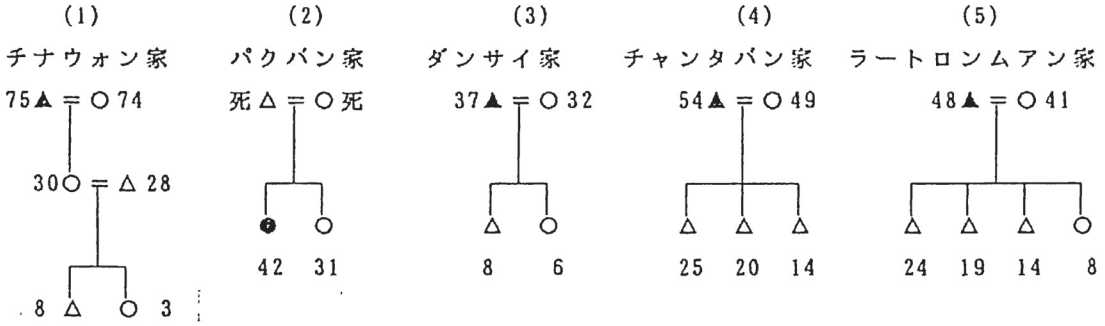
調査期間は1983年７月13日から1984年３月13日の245日間、対象者は５世帯23人である。他分野の共同研究者との連携を考えて、1983年調査での重点調査地域であるノング・シムバーンという一水田団地で耕作する農家の中から対象世帯を選び、その世帯員すべてを対象とした。また調査が長期にわたるため、対象世帯は協力的でかつ調査票の記入ができる者がいることが条件となった。

サンプリングにあたっては、これらの条件のほかに対象にバラエティーを持たせるため、次のような基準も考慮にいれて選定された。

１．耕作水田の水条件。
２．家族構成。
３．就業構造。
４．生活水準。

このようにして選ばれたサンプル５世帯には次のような特徴がみられる。

家族構成




（世帯主を黒で表わす。数字は年齢。）

就業構造・生活水準・生活圏

(1) チナウォン家

世帯主夫婦は農業より引退しており、末娘夫婦が主となって農業を行なっている。農業のなかでは野菜作に重点が置かれており、主な現金収入源は野菜の売上げである。いわゆる専業農家であり、世帯主が竹細工をしているほかは、農業以外からの収入はほとんどない。日常的に村外へ行くことはほとんどない。農地経営面積：（水田6 ライ、畑地 5.75ライ、菜園1 ライ）

(2) パクバン家

未婚の姉妹２人が世帯員である。この姉妹の妹は結婚しており隣に世帯を構えている。この世帯と共働・共食の関係にあるので、その経済状態を世帯単位で厳密に把握することはできないが、この２人だけでみると、かなり貧しいといえる。隣家とはかなり頻繁に行き来しており、ひとつの家と考えてみてもよいくらいである。稲作と自家消費用の野菜作のみを行ない、農耕には主に姉が従事している。妹が不定期に建設作業員として働きに出るのが唯一の現金収入源である。農地経営面積：（水田31ライ、菜園0.5 ライ）

(3) ダンサイ家

この世代にしては広い水田を、親族と共同耕作している。畑作、野菜作は村内の農家では平均程度に行っており、それのみにより現金を獲得している。稲作の労働時間はサンプル農家のなかで一番多く、典型的な専業農家である。稲作において共同労働を行なっているため、親族との接触ははげしい。農地経営面積：（水田26ライ、畑地8 ライ、菜園3.75ライ）

(4) チャンタバン家

長男はすでに教育を終えており、生産活動に従事している。世帯主は国立の東北地域農業センターで夜警として働いている。農業のほか、よろず屋を経営し、主に妻が従事している。農業の規模も村の平均以上であるが、現金収入がきわめて多く、村でも上層に位置する。世帯主の通勤、子どもの通学のほか、野菜を売りにも行くので、村外へ出かける頻度はきわめて高い。農地経営面積：（水田20ライ、畑地5 ライ、菜園1.5 ライ）

(5) ラートロンムアン家

世帯主は以前から現金獲得に熱心で、種々の商売に携わり、村内ではかなりの経済的地位にあった。1983年村長に選ばれた。小学校教師である長男は、30kmの道のりをかよっており、他の子どもはまだ学生である。現在この世帯は稲作、畑作、野菜作のほかには豚の飼育と精米業を営んでいる。村長という性格柄、つき合いの範囲は非常に広い。農地経営面積：（水田10ライ、畑地11ライ、菜園0.75ライ）

調査は、時間軸が書かれた調査票に世帯員の一人が家族の毎日の行動を書き入れることにより行なわれた。調査票には行動の内容だけではなく、行動の場所、だれと行動を共にしたかも書き入れられた。回収された調査票の内容はすべてコード化され、コンピューターにインプットされたが、記録された行動を最初からカテゴライズしてしまわずに、書かれたままにコード化して解析した。そのため、データはきわめて高い具体性をもち、日々の行動記録としての意味をそのまま持つ。

われわれの調査には、長期継続性、具体性という特徴があるので村人の生活行動を包括的にとらえることが可能になる。分析は、一般的な時間利用と生活の季節的変化をみたあと、現在は行動の場所、対人関係のデータも使用して一般の生活時間調査にはない分析を試みる段階にある。本報告では全体のテーマである「家族と親族」をふまえて、家族内でのさまざまな共同のパターン、家族員の役割関係、家族の生活圏、家族の交際圏の分析結果について報告する。